

関西大学と北陽との縁について

鈴木清士

はじめに

平成十九年三月十五日に学校法人関西大学と学校法人福武学園との間で合併調印式が行われた。記者会見当日資料としてプレスリリースされた記事では、「合併の主旨」「北陽高等学校の事情」「関西大学の事情」という項目に続いて「北陽高等学校と関西大学との深い縁」が次のように紹介されている。

「北陽高等学校は、一九二五年（大正十四年）、北陽商業学校として発足しました。創始者の山岡倭氏は、「関西大学中興の祖」と言われる山岡順太郎先生のご子息であり、初代校長の糸島実太郎先生は関西大学

専門部経済学科のご出身です。当時、関西大学学長であった山岡順太郎先生は、糸島先生を援けて設立に力添えされました。爾来、折々に関西大学出身者が北陽高等学校の発展に寄与してきました。また、関西大学の稲野治兵衛元理事長は、北陽商業学校の「ご出身です。」

そして、翌年四月一日に北陽高等学校は関西大学北陽高等学校と校名を変更し、男子校から共学校に生まれ変わった。昭和十九年から福武学園が経営してきた北陽高等学校は、六十三年にわたる歴史の幕を閉じたことになる。

「北陽」の歴史は次のように大きく三つに区分すること

ができる。

I 大正十四年四月

北陽商業学校の時代

昭和十九年三月

II 昭和十九年四月

北陽高等学校の時代

平成二十年三月

III 平成二十年四月以降

関西大学北陽高等学校の時代

北陽商業学校の時代を物語る歴史的な資料や写真の大半は戦災で焼失しているが、初代校長の糸島実太郎による歴史の証言が『北陽三十周年史』（寄稿）および『北陽高等学校三十五周年史』（口述）として現存している。また、第八代の校長であった林敏夫氏は、創立六十年の区切りの際に歴史の掘り起こしを丹念に行い、それと並行して北陽商業学校の卒業生による座談会を通して当時の記憶を鮮明に再現し、『北陽六十年史』にまとめられている。

本稿の目的は、それらの資料や情報から北陽商業学校の時代の歴史を紹介し、関西大学の関係者にはほとんど知られていなかったであろう、関西大学と北陽との縁（えにし）について深く知っていただくことにある。

また、関西大学の熊博毅氏（学術情報事務局次長）の

お導きで、北陽設立者の山岡倭氏のご長男である康氏と二回にわたりお話を聞かせていただく光栄に恵まれた。

一回目は平成二十一年四月二十三日、関西大学の博物館においてであり、二回目は平成二十二年三月十日、四十分間にわたる電話での質疑のやりとりである。

山岡康氏から得られた情報は、創立の経緯における不明な部分を埋め、いくつかの断片的な史実をつなぎあい、少なくとも筆者にとっては血の通った一つのストーリーとすることができた。ただし、それらの中には個人情報も多く、そのすべてを公開することはできないことをご承知頂きたい。なお、糸島実太郎と山岡倭の両氏については、文中敬称を省略することもご承知願いたい。

一 北陽商業学校の創設

糸島実太郎は、明治二十八年岡山県吉備郡吉備町に生まれ、郷里の黄薇尋常高等小学校を出て上京し、桃山中学から関西大学専門部経済学科に学んだ。卒業後、北大阪鉄道（現在の阪急電鉄）に勤めていたが、早くから教

育に深い関心を持ち、人づくりの重要性、特に勤労少年に対して教育の機会を与えることを真剣に考えていた。例えば、天王寺にある自彊学院という学習塾で教えていたという記録が残っている。これは、尋常小学校を出て働いている少年を対象に、中等学校に入学するまで懇切に教えるというもので、後に北陽で数学の教師となった川崎俊治が主宰していた。また糸島夫人が豊津小学校の教師をしていた関係で、垂水近在の児童を夜無償で熱心に教えたことがあるという。ただし、糸島が教育事業への意欲を高め、学校経営の道を歩む直接の動機になったのは、淀の水高等女学校の創設に参画したことがその一つである、といわれている。



初代校長 糸島実太郎

当時の日本は、近代化に伴い、時代に即応する新教育を身につけた人材の育成が求められた。中等学校への進学希望者も激増し、公立、私立とも中等学校が次々に新設されていったが、第一次世界大戦後は経済不況に見舞われた。公立学校の新設に歯止めがかかり、期待は私学に向けられ、その中でも商業の都大阪にしては商業学校が少ない時代であったから、より商業学校に期待が集まったのである。

北陽商業学校もその潮流の中で誕生するのである。学校創立の動機と経緯については、糸島校長自身が『三十五周年記念誌』で次のように語っている。

当時府では予算がなく、学校の設置は困難でありまして大きな問題となりました。そこで私立学校が次々に建てられたもので、特に実業学校が多く、実業校といっても大阪は土地柄商業学校が多く新設されました。

本校は当時関西大学の専務理事で教授を兼ねて居られた宮島綱男先生と関西第二商業学校の校長であ

つた木下孫一先生と私が相談して特色のある商業学校を作ろうと計画いたしました。特に勤労学生のために、在来のもと異なった設備の整ったものにしたら生徒のためにもまた学校経営の上からも好都合であろうというので設立を決心いたしました。当時は私も若く二十七歳でしたが、宮島先生や木下先生との話し合いの結果、私がやることになったのです。

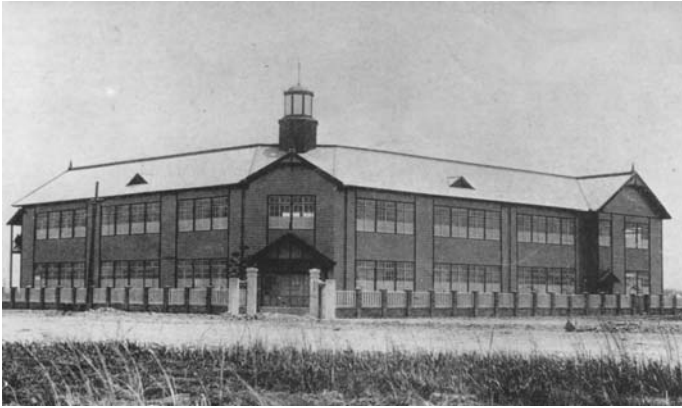
ところがその頃、学校創設するには財団法人でなければならず、そうでない時は財産七十万以上なければ個人設立を許されなかったのです。

日本の実業界でその人ありと知られていた日本電力の社長山岡順太郎さんが関西大学の学長をしておられ、何かとご指導を願ったのです。その御子息の倭さんも大鉄の社長で親子ともに実業界に出ておられ、お父さんが亡くなられた後は倭さんが本校創設にご協力くださいました。

学校開校についての認可は大正十四年三月三十一日に下りました。第一本科、第二本科（夜間）ともに甲種商業として認められることになりました。

とはいえ、困ったことにはなかなか校舎が見つからない。やっとのことで丁度元長柄北税務署で一時淀の水高等女学校の仮校舎のあった建物を見つけて、高い家賃でしばらく仮校舎として借りることにしたのであります。そして其の間にこの校地を交渉しました。私は学校を卒業してすぐ北大阪電鉄（今の阪急電車）に勤めていましたので、その時分の御偉方と交渉してこの土地の買収にかかったのですが、幸いに認められて年賦で分けてくれました。

こうして、とにかく校地が定まりましたので建築にかからねばならない。ところが私が金を少し持つておっただけで木下先生も宮島先生も金がなく、先生方はとに角協力はしよう、関西大学甲種商業学校の兄弟校のようにしてやってくれというので、結局いろいろとやりくりをして校舎の建設は私の教え子の親の経営する出水組に引き受けて貰うことにして第一期工事を完成しました。長柄の仮校舎よりここに移ったのが大正十五年であります。それから昭和二年に今も、一部姿を残すあの校舎の第二期工事を、



北陽商業学校の校舎

さらに明三年に講堂と理科教室の建築にかかったわけで、三年間に亘ってどうにか校舎の建設だけ終えたのです。

生徒募集も順調に行って仮校舎のときの競争率は二人に一人くらいの割でありました。募集は第一本科、第二本科共に百名で、特に第二本科の勤労学生が多く、この方は取り扱いに困るほど来ましたので、何しろ仮校舎のことで身体検査の設備もなく仕方なしに身長の計器の代わりに柱に印をつけて使ったほどであります。勿論人手もなく今の関大の森川君の友達である園野君と私と小使いさんと三人で生徒の募集に当り、入学試験の時は全部淀の水高等女学校から応援に来てくれました、御蔭で一部も二部もあふれるほどの志願者をさばくことができました。

糸島の話は後半も続くが、いったんここで切り、注釈と分析を付け加えることにする。

(一) 校名について

糸島実太郎は、この学校に「北陽」と命名した。「山の南を陽と名づく」という故辞から、千里山の南、淀川の北に位置する学校の存在を主張したのである。淡路駅の東南、下新庄の田園の中に、チョコレート色の屋根のある学校がポツンと一つ出現した、というのが創立当時の北陽の姿であった。その周囲には一軒の人家もなく、北は神崎川を隔てて遠く千里の山並みを仰ぎ、東は遙か淀川の彼方に生駒の連峰を望むことができたという。

本校の校名は戦争の前後にめまぐるしく変わる。創立から今日までに経営者は二度変わるが、それでも「北陽」の二字は消えることはなく、依然として北陽であり続けた。

(二) 糸島実太郎の相談相手

北陽の創立にあたり、先の校名を含めて商業学校としての教育理念や教育方法については糸島の個性がかなり色濃く出ることになるが、しかし設置認可への用意は周到で、創立の二年ほど前からしかるべき人たちと綿密に

案を練る。その相談相手になったのが、最初は山岡順太郎氏、そして後に宮島綱男氏と木下孫一氏の二人であった。

糸島が学校創立の意志を表明し、山岡順太郎氏に指導を願いだしたのは大正十二年であった。

その前年の大正十一年、山岡順太郎氏が大学昇格運動の中心となり、関西法律学校は関西大学へと昇格する。順太郎氏は関西大学の総理事であり、後に学長になられた。

一方、宮島綱男氏は、ヨーロッパを留学した後大正二年から七年まで早稲田大学教授を務められ、大正八年に関西大学の教授に迎えられた。経済学を講義する傍ら、大正十年から昭和初期に至るまで教授兼専務理事として務められ、大学昇格に対し尽力し、昇格直後の多端な大学の経営と教育に当たった。おそらく順太郎氏にとって最も信頼すべき人の一人であっただろう。

順太郎氏が糸島からどんな相談を受けたのか、あるいは糸島にどんな指導やアドバイスをされたのかは一切不明で、糸島も文中の内容以外は語っていない。ただ、順

太郎氏にとつては学内外において繁忙な時期であり、大学昇格後はさらに大学経営に対しても苦慮する只中にあつたわけであるから、「私は今多忙である。したがつて」学校の立ち上げに関することや商業教育のことは宮島教授に聞きなさい。また関西第二商業学校ともうまくやる必要があるから、木下校長とも相談しなさい。学校経営のことは息子の倭にお願いしてみよう」という意味のことを言われたらうことは、容易に想像がつく。

なお、北陽商業校歌は関西大学の服部嘉香教授が作られている。糸島校長が直にお願いをしたか、あるいは早稲田つながりということで宮島綱男専務から依頼がいつたか、そのいずれかであつたと思われる。

(三) 関西第二商業学校と北陽商業学校との関係

糸島実太郎が語る文中に「関西第二商業学校の校長であつた木下孫一先生」と「関西大学甲種商業学校の兄弟校のようにしてやってくれ」とあり、二つの校名が出てくる。ここで、関西大学第一高等学校の歴史の中における変化を確認しておく次のようになる。

大正元年八月：文部省告示を以つて社団法人関西大学付属「私立関西甲種商業学校」設立認可

大正二年四月：本科三年制として開校

大正十三年四月：「関西大学第二商業学校」設置認可、開校

その後、学制改革により、昭和二十二年に「関西大学第一中学校」、昭和二十三年に「関西大学付属第一高等学校」を開校する。「関西大学第一高等学校」と改称するのは昭和二十七年である。

いずれにしても、糸島が北陽の創立を考えている頃に「関西第二商業学校」が開校したことになる。ところで、糸島は初めから自分の学校を創りたかつたのだろうか、あるいは実際には関西大学の第二の附属校を願つていたのだろうか。筆者には甚だ興味のある点ではあるが、斬新さを常に追及した糸島の性格からいえば、明らかに前者であつただろうと推察できる。むしろ、「関西第二商業学校」には負けない、という青年としての気概をもつて臨んだと思われる。だとすれば、設置に当たつて相談を受けた木下校長もやりにくかつた面が多々ありであつ

たのではないかと思う。血氣盛んな糸島校長に、おそらく宮島専務から「木下校長のところと兄弟校のようにしてやれ(仲良くやらんか)」と苦言を呈されたのではないだろうか。

なお、北陽の建学の精神は「知徳体の調和の取れた人間の育成」であり、一高の建学の精神は「知徳体の高度に調和の取れた人間の育成」である。「高度」があるかないかの違いだけで、ほとんど同じであるのは、木下校長との「相談の結果」であった、……かどうかは不明であるが、偶然の一致でないことは確かであろう。

なお、「知徳体」について糸島は「智(知)・仁(徳)・勇(体)」とした。

二 北陽商業学校の教育

以下、糸島実太郎の『三十五周年記念誌』における後半の口述部分を記載することにする。

施設について

本校としては、学校の施設を他の学校にない教育

内容を盛ったものにして、他と違った教育をしようというのが目標で、勤労学生の為に特色のある学校としようというのがモットーで発足したのです。

こちらに移ってからは、夜間生のためには教室にストーブを入れてやり又彼等は理髪に行く暇もないので、散髪部を設けたり、歯科の治療のため、野林という私の友人を無理に頼んで夜間の施療を始めました。こうした生活部の活動は年と共に内容が充実されて行き、後には昼間生の利用する者もかなりありました。

学校を建てて困ったことは水道がなかったことです。井戸水は飲料水には不適當だといわれ途方にくれました。ところが地主である阪急電鉄が大きな犠牲を払って、柴島の水源地から直接鉄管を引いてくれたので非常に助かりました。何しろ当時の金で七千円かかりました。こんなことは到底学校だけで出来る事ではなかったのです。現在の金にしてみますと何百万円にも当たります。

次に骨を折ったことは、電燈の問題であります。

その頃は下新庄のお宮迄しか来ていなかったもので、そこから柱を立ててやつのことで灯もつくようになり、なりました。これで夜間の授業にも事欠かなくなり、ほっとしました。

もう一つ生徒の通学する通路の不備なお手上げの状態でした。これはなかなか早急に解決の出来る問題ではありませんでした。駅から学校までは田圃道、それも雨でも降るとぬかっつて、ゴム長靴でなければ通れないという真にお粗末なものでした。これが完全な解決には二、三年の時が必要でした。

校風と教育方針について

とにかくこうして学校としての体裁が大体完備されましたので、この上は他に見られない特色のある校風を打ち立てようと、毎日先生方といろいろ案を練った次第です。幸い私も若く、先生方もベテランと若手がミックスされていたので妥当な行き方をとることが出来ました。即ち、公立と同じ日に入学試験を行うことにしました。これは創立以来私が退任するまで堅持されてきました。公立のお余りを頂戴

するということではいつまでたっても内容的に向上しないし、校風も廃れるという考え方からです。その学校の校風を慕って来るというのではなければ私学として存立の意義はありません。

学科は普通科目に重点を置きました。一例を挙げると、国語科の如きは週七時間、英語もそれと同じくらいありました。当時は情操教育がやかましく言われまして、本校も音楽を週一時間宛て配当いたしました、第一本科は三年迄、第二本科は二年迄教えていきました。このほか、剣道を正課として取り入れていきました。

最初から本校の校風に惹かれるものを收容するという見地から、ズバ抜けた秀才を集めようとは考えませんでしたが。大体普通の上、中の上、点数でいくと八点以上に目標を置いて、願書受付のときに点数の悪い者は他へ廻るように説いて受理しませんでした。こちらにも変わった行き方だったと思います。あくまでも人間を育てるという信念で一貫いたしました。

次に校訓について一言いたします。その時分は質実剛健とか、その他教育勅語の文句をとっている学校が殆どでありました。こうしたなかで「親を思え」「人徳を積み」という至極平凡なものでした。

学校行事や特色ある教育について

⁽²⁾ 学校のPRは私立学校としてはいつの時代でも必要不可欠のことです。ところが本校は絶対に学校訪問と教員招待はやりませんでした。これは現在でも自分としてよいことだったと思つて喜んでおります。

何かと一歩他に先んじてと考える考え抜いて、上品な方法で効果をあげるようにと頭を絞つて次のような方法で進みました。その第一は全府下の小、中学校珠算大会。これは⁽³⁾大阪商業会議所の後援で中央公会堂の二階ホールで行いました。これが前期の大きな催しでありました。この日の結果はB・Kから夕方の放送に組まれるほど権威を持っていましたが、商業会議所が私学のために名を出すということが相問題になりました。私も若かったので心臓も相当なものだったでしょう。会議所の理事



全関西中等学校小学校雄弁大会（中ノ島中央公会堂）

を相手に連日頑張りましたので、終にはとうとう折れてしまいました。理由は一私学の後援という立場がなく、府下全体の小、中学が参加するという立場を重視してということです。

第二学期は運動大会でした。京阪電鉄の好意で切符の割引その他便宜を図ってくれたので三、四千の

観衆を集めました。勿論府全域に亘つての小学校の選手が参加しました。

第三学期は雑誌「北陽」の発行、これを各小学校に配布しました。それから忘れられないのは映画であります。これは時を定めないで絶えず行われていました。小学の映画担当の先生方を集めての講習会、私の作った商事要綱の映画を教材としてPRと共に商業教育の普及に努めました。

前に述べたように普通科目が多かったので人によっては中学校と同じだといって、進学を目的とする生徒も多数おりました。そんな関係から教育に理解を持ち、経済的に社会の上位にある家庭の子弟が多く在学しました。したがって生徒もおとなしく、よく勉強しました。その証拠としまして女の先生が五、六人もおつて立派に成果をあげていました。夜間生には秀才が多くいました。これは夜間の甲種商業が少なかった関係もあります。

校友会の事業にしてもそれぞれ特色を持って、第一、第二本科生と先生が一丸となつて活躍していま

した。学校が余り大きくなかったので出来たことだと思ひます。

毎日新聞、朝日新聞が少年社員を毎年多数委託生として夜間に送ってきたのも本校の特色に着目したことでしょう。

あまり自慢ばかりしてどうかと思いますが、本校の剣道は全国に名前を知られていました。特に田口君、中尾君等の全国制覇は本校の穩着実な校風を校の内外に高めました。生徒募集についても何の心配もなく経営して行くことができました。

少し長い引用になつたが、北陽商業学校における教育の特色の全貌がこれでご理解できると思ふ。

次に、北陽の初代同窓会長である阿部甚吉氏が当時の学生氣質について語つた言葉を、北陽創立三十周年および三十五周年で在校生の前で行つた祝辞からいくつか引用してみよう。

氏は昭和二年に卒業後、日本弁護士会会長を務め、関西大学の評議員会議長も務めた方である。

「私が先輩に連れられて初めて本校に来た時、途中で色の白い袴姿の青年を指して、これが校長先生だと教えられ、若い校長先生だなど思ったものであります。この若かりし糸島校長先生の率先窮行の教育には私達悪童もつくづく頭が下がります」

「そうしますと、それにしてお前は少し年が行き過ぎていてのではないかと諸君は考えるでありましょうが、その通りで、われわれの頃は、必ずしも諸君のように中学校を出てすぐにやってきたというような、生易しいものではなかったであります。私がこの学校を出たのが数え年二十三歳で、しかも私も年上なのがおりまして、あごひげを生やして学校へ来て、先生に叱られた人もいました」

「この頃、この学校は野原の中の一軒家でして、淡路駅の付近に人家が少しあり、その他には一軒も家がない状態で、野原の中を歩いて学校へやってきたのです。体操の時間には前へ進めという号令がかかると、それから後はただもう後ろも向かず先へ先へと田圃の向こうの川まで行って蛭や蛙を取ってくる

というような始末でした。それを先生の机の中にいれ、先生が机の引き出しを開けると、蛙が飛び出してくるというようなことをして喜んでおったような始末でした」

「ところが、その頃からでもやはり北陽スピリットということが言われたのであります。まだ学校が出来たばかりなのにスピリットもくそもあるかと、われわれは考えたのであるが、不思議に今日においても校風というものが変わっておらない。その頃ずいぶん乱暴したように言いましたけれども、しかし勉強もしました。喧嘩はそんなにしていません」

「本校は不思議に野球は強くないけれども、剣道はその頃から非常に強く、われわれの時代にも、また後のほうでも高段者になった者も多数おり、その中でも例えば本校から早稲田大学へ行って主将を務め、七段で現在兵庫県の警察で指南をしている中尾君という達人もおります」

「ああしていっしょに机を並べて勉強した友人たちの中、最近親しく会えるのは十人そこそこです。学生

時代に才能に任せてがむしゃらにやったのは早く減
んでしまいます。どうかゆつくりそして焦らず堅実
にやってください。」

なお、昭和三年卒業の鷺見孝義氏（元岐阜刑務所長）
の言葉を付言しておく。

「糸島校長は生徒の面倒見が大層良かった。弁護士試
験を受けるのに、関大の特科生になって、それから
北陽の第二本科へ入り、卒業と同時に関大の本科生
になる道をつけるとか、兵隊で期限の切れた人に卒
業を認定していただいたとか。で、今の特科生にな
って予備試験免除で弁護士になった人が多いのです。
阿部甚吉君も段林作太郎君も皆そういう風に面倒を
見てもらったのです」

三 創立者の想い 親子の情

(一) 山岡倭と糸島実太郎

筆者は平成二十一年四月二十三日、関西大学の博物館
において山岡倭のご長男である康氏と初めてお会いをし
せていただいた。まず、「お父様に北陽を設立していただ

きました。有難うございます」と北陽の代表者として御
札の言葉を申し上げた。八十五歳でありながら、なお現
役の経営者として矍鑠とされているお姿に大変感銘を受
け、お話をさせていただく時間をいただいたことに光榮
な気持ちで一杯であった。

話の時間の多くは山岡倭とスポーツ、とりわけ野球の
話であった。優秀な選手をスカウトしては関大に入れた
こともあり、関大野球部がアメリカに遠征に行ったとき
にはかなりの犠牲を払った、という話である。ただし、
本稿においてキーワードになるのは、康氏が私に最初に
語った次の一点である。

「糸島校長が山岡邸を訪れていたのは、私が幼稚園の
頃ではなかったかと思えます」

康氏は大正十三年（一九二四）の七月生まれである。康
氏が幼稚園の頃であれば、四歳か五歳。そうすると糸島
校長が山岡倭邸を訪れていたのは昭和二、三年というこ
とになる。

筆者は、糸島校長が山岡邸を訪れたのは専ら北陽設立
認可時の出資のお願いに行っていたと勘違いをしていた

が、実はそうではなかった。糸島自身も「父親の順太郎氏が亡くなられた後は御子息の倭氏が本校創設にご協力くださった」と語っていたではないか。

山岡順太郎氏が死去するのは昭和三年十一月である。

康氏も幼稚園以前の記憶はないだろうから、糸島校長が山岡邸を訪れている期間にはある程度のスパンがあり、大正十三年から少なくとも昭和四、五年までは糸島校長は山岡順太郎邸もしくは倭邸を訪ねて行っていることになる。つまり、創立前から創立して後も、教育的側面から経済的側面まであらゆる相談と報告を継続していたのである。

ここで、糸島校長と山岡順太郎・倭父子に関わる年表を整理してみることにする。

- 大正十一年六月 関西大学の昇格 (一九二二)
- 大正十三年五月 山岡順太郎氏 総理事になる (一九二四)
- 大正十三年七月 山岡康氏 誕生 (一九二四)

大正十四年三月 設立者山岡倭氏文部大臣の認可を得 (一九二五)

て、東淀川区長柄町一一七番地に仮校舎を造営

大正十四年四月 北陽商業学校開校 (一九二五)

大正十五年八月 糸島校長就任 (一九二六)

大正十三年から昭和四、五年までは糸島校長は山岡順太郎邸もしくは倭邸を訪ねて行っていることになる。つまり、創立前から創立して後も、教育的側面から経済的側面まであらゆる相談と報告を継続していたのである。

昭和三年十一月 山岡順太郎氏死去 (一九二八)

昭和十四年五月 設立者山岡倭氏死去 (一九三九)

昭和四十五年五月 糸島実太郎氏死去 (一九七〇)

北陽商業学校は、実際には諸環境が完全な状態でスタートできたわけではなかった。大正十四年の設置認可後、田園地帯にスマートな校舎が建つには建ったが、水道は引いていない、電灯もない、通学路は不備である、保健室もない、専任の教職員も十分に採用できない、という

更認可

設立者名義を校長糸島実太郎氏に変

山岡順太郎氏死去

糸島実太郎氏死去

大正十一年六月 関西大学の昇格 (一九二二)

大正十三年五月 山岡順太郎氏 総理事になる (一九二四)

大正十三年七月 山岡康氏 誕生 (一九二四)

大正十三年七月 山岡康氏 誕生 (一九二四)

大正十三年七月 山岡康氏 誕生 (一九二四)

ような有様であった。つまり、施設・設備の拡充と人事の改善を繰り返しながらだんだんと学校らしくなっていたわけである。その間の資金繰りは糸島自身の手持ち資金や授業料収入だけでは到底無理であった。だからこそ、糸島は設立後も何年間かの期間にわたり、「設立者山岡倭」から相当の援助を必要としたのであり、そして、倭は糸島の願いに応えていったのである。

第一次世界大戦終了後、大正時代末期から日本は経済不況が始まり、大正の経済不況が回復しないまま昭和を迎え、昭和四年（一九二九）からは世界大恐慌が始まる。

そんな時代に大阪鉄道（現在の近畿日本鉄道）の社長やその他の会社の取締役を務めていた倭自身は、本来なら北陽どころではなかったかもしれない。しかし、そんな状況に置かれていても、倭は設立者としての責務を全うするために北陽商業学校を献身的に支えたのである。

昭和十四年五月三十日、糸島は最大の恩人を失う。この日、山岡倭は腎臓病で亡くなるのである。五十歳の若さであった。葬儀は六月一日阿倍野斎場で執行され、北陽商業学校の教職員全員と生徒代表はこれに参列して、

学校設立者に最後の別れを告げた。

（二） 山岡倭の人間像

筆者は、山岡康氏と平成二十二年三月十日、四十分間にわたり電話でお話を伺った。それはまずは山岡倭と糸島実太郎とのつながりを探るためであったが、残念ながら康氏の幼少の頃であり記憶の彼方であった。次なる目的は山岡倭の人間像を探ることであった。もちろん、それは長男康氏から見た人間像である。

宮島綱男氏について

鈴木「関大の専務であった宮島綱男氏とは順太郎・倭親子と深いつながりがあります。また糸島校長も宮島氏を大切な相談相手にされていました。康様は宮島氏についてご記憶がおりですか」

康氏「家族でよく食事をしたのを覚えています。専務とか教授とか言うのではなく、私は子どもでしたから、普通のおじさんのようにしか感じていなかったと思います。しかし十四歳で父を亡くしてからは、正月には宮島氏の家に伺っていました。多分にファザーコンプ

レックスを持っていたと思います。千客万来で、いつも十人くらいの方が待っていました。やっちゃん、よく来たね、と言って迎えてもらいました。」

選挙について

鈴木「お父様は衆議院選挙に出馬し、わずかな票差で落選されています。政党からの支援もなく、個人で出馬されていますが」

康氏「南河内郡から立候補しています。順太郎の威光もあつたでしょうが、政党などは当てにできなかったのはそうでしょうなあ。なにしろ父は人の金を使うのは嫌な性分でしたから。だから私は今貧乏しているんです（笑）」

相撲について

鈴木「前回お会いしたときは、お父様と野球の関係のお話が多かったのですが、相撲もお好きだったそうですね」

康氏「順太郎は横綱太刀山の谷町でした。父親の倭も相撲が好きで、相模川という関脇までいった力士の谷町でした。相模川は表敬訪問のために家によく来て一緒

に食事をしました。大きな体をしていましたが、あまり強くなかったという印象です。父は新地の「かわむら」というお茶屋へ相模川を連れて行き、ずいぶんお金を使っていたようです。そこへ私もよく連れて行かれました。社会勉強には少し早過ぎたと思いますが、虫が知らせたこともあつたのでしょうか」

子どもへの接し方について

鈴木「父親として尊敬している点を聞かせていただけませんか。倭氏の間接像を知りたいと思います」

康氏「キャッチボールをすれば手加減せずにピシッとボールが飛んでくる。学校も少々のことでは休ませない。その意味では私はスパルタ教育を受けました。その意味では厳しかったのですが、その一方では父から大変愛されていました。例えば、私は父と一緒に「展望車」といわれる特別な車両に乗せてもらったことがあります。定員は十六人で、回転するアームチェアに座り、下には絨毯がひいてあり、車両にはボーイがいるのです。大臣でも乗らないような車両に子どもを乗せるのは贅沢のさせすぎでしょう。ところが、父の姉に対する

るかわいがりは私以上だったので。当時は飛行機には女性は乗りませんが、父が大阪から東京へ飛行機で行ったとき、姉を連れて乗せたのです。そのことで姉は大阪で初めて飛行機に乗った女性になったわけです。私はそんな姉に正直いつて嫉妬していました(笑)

康氏は最後に「父は経済的に厳しい折にも、そのことで子どもに心配をさせまいとしました。それが父の愛情であつたように感じます。父はいろいろな弱さをもつた人間だったかもしれませんが、父と祖父のどちらに今会いたいかと言われれば、やはり私は父に会いたいです。完璧な順太郎よりも、人間らしい、情のある倭に限りない魅力を感じます」と結ばれた。

(三) 戦争、そして糸島実太郎の決断

北陽商業学校十周年を迎えてまもなく、満州事変、支那事変、大東亜戦争と軍国色が濃くなっていく中、昭和十八年、戦時非常措置令により、北陽商業学校であった北陽は工業学校への転換を命じられる。このとき糸島校

長は「わしは工業学校はやれん」と言つて郷里の岡山に帰つていった、ということになっている。この辺の経緯は北陽関係者も多くを知らない。同窓会長を阿部甚吉氏から受け継いだ稲野治兵衛氏も「なんであんなに教育熱心な先生が北陽を譲つて郷里に帰られたのか。一体どういう動機で経営をやめられたのか疑問です」と、林元校長に語つておられたから、やはり当初はご存じなかつたようである。

糸島校長自身は三十周年を迎えたときにこう語つた。「商業学校は自由主義、たとか戦争遂行の邪魔になるとかの理由で、工業学校に転換すべしとの命令を受け、光輝ある北陽商業は北陽工業の名に変更を余儀なくされたばかりでなく、卒業生や先生方は次から次へと召集されて行き、戦争がいよいよ鮮烈を加えるにつれて、北陽関係者の戦病死する者も相次いで、三数名の悲報を聞き、葬儀に列する毎に、まったく耐えられない思ひでした」

糸島校長は北陽と決別する覚悟をするが、「北陽」の存続を考えて、引き取り手を捜すのである。一方、西淀川

区御幣島にスピンドル製造を主とする、関西スピンドルという会社（福武吉太郎氏創設）があった。当時は軍需省の管轄下にあり、航空機の工具等の軍需物資を製造していた。代表者である福武平十郎氏は、中堅の技工を養成するために、青年学校を母体としてできた財団法人「福武工学校」を持っていたが、時代の要請に応えさらに本格的な技術者の育成を目指し、これを工業学校（修業年限三年、機械科）に昇格させるべく文部大臣に申請していた。しかし、物資不足のため校舎建設の計画が実現されないままであった。

そんなところに糸島校長と福武氏が出会いをする。買収の話が成立（譲渡価格は二十二万円）し、昭和十九年に学校法人福武学園が誕生する。福武平十郎氏は「北陽の法燈は絶やさず守ってほしい」（北陽という名と建学の精神を存続させてほしい）という糸島校長の切なる願いを全面的に聞き入れるのである。

要約すれば右記のようになるのだが、糸島校長の北陽に対する愛情と複雑な思いは、今は想像するしかない。確かに言えるのは「北陽」の歴史と伝統はそこで断絶し

なかった、そこに糸島校長と福武平十郎氏の至誠を感じるのである。

結び

平成十九年に合併が成立した大きな要因の一つは、本稿で示したような北陽と関西大学の間には歴史的なつながりがあった、という事実である。そして校長としての私の本意は「もともと関西大学と深い縁のあった北陽を、再び関西大学にお返しをさせていただく」ということであつた。

本稿の主旨を十分に関大関係者の方々にお伝えすることはできなかったかもしれない。それでもなお、私は歴史のつながりの深さと北陽の伝統を支えてきた山岡順太郎・倭父子を初めとする多くの先人や恩人に対して、改めて感謝せずにはおられないのである。

補足

(1) 糸島と淀の水高等女学校との関係

文中に何度も登場する淀の水高等女学校では、同校

の記念誌によると糸島を創立時の功労者としており、昭和二年に退職と記されている。北陽創立時も、北陽と淀の水高等女学校と兼務の教員が多く、男子校でありながら女性の教師が結構いたという。

(2) 広報活動

手元に、熊氏から入手した昭和五年『関西大学学報』第八十一号の三十五ページのコピーがある。それは北陽商業学校の入学案内のページであり、「本校の特色」として「人格の感化は本校教育の第一義」「本校商業学科と実力養成」など八項目が挙げられている。その八番目に「関西大学校友推薦無試験入学」とあり、関大卒業生の子弟は無試験とする制度の記載がある。

(3) 大阪商業会議所

文中では「私も若かったので心臓も相当なものだった」「会議所の理事を相手に連日頑張った」とあるが、心中は「自分はこの会議所の会頭であった山岡順太郎氏と深い関係がある」という思いがあっただろうし、実際にそう言って無理を通したかもしれない。因みに山岡順太郎は大正六年から四年間、第八代の会頭を務めている。

なお、文中には出てこないが、北陽商業学校主催による「全関西中等学校小学校雄弁大会」が昭和二年から実施されている。これも大阪商業会議所が後援で、中ノ島中央公会堂で行われた。第一回の審査委員長は関西大学の辰己教授という記事が残っている。写真はその模様である。

(4) 衆議院選挙に出馬

第十六回衆議院選挙において大阪六区（南河内郡）から出馬。定員二名に対して四人が立候補したが、倭はわずか二百六十七票差で次点になった。当選した二人はそれぞれ政友本党と憲政会の支援があった。

(5)

糸島実太郎の故郷である岡山県吉備郡吉備町岡田村は、昭和二十六年に河辺村と合併して大備村となるが、その年に糸島は初代村長（昭和二十六年五月三十日）昭和二十七年三月三十一日）に就く。その後大備村は他の村と合併して真備町となり、平成十七年に倉敷市に編入された。

(6) 稲野治兵衛

昭和十年に北陽商業学校を卒業、関西大学から毎日新聞に入り、専務取締役の要職を歴任。平成三年に関

西大学理事長に就任。大学の発展はもとより、日本私立大学連盟常務理事、大阪市教育委員長としても活躍した教育界の重鎮であった。卒業式にはよく「大阪では北野高校が有名かもしれないが、北海道では誰も知らない。そこへいくと、日本のどこへ行っても北陽の名を知らない人はいない。諸君はそんな北陽の看板を背負っている」と挨拶した。

また氏は、本校六十周年記念事業として育英資金制度を発足し「学業成績が良く品位があり、スポーツに優れた生徒を毎年一人でも多く迎え入れるということ、創立以来六十年受け継がれてきた建学の精神を再認識することである」と、同窓会員への賛同と協力の呼びかけに奔走された。現在の「稲野奨学基金」は、そのときの資金が元となっている。

(すずき きよし 関西大学北陽高等学校・

中学校校長)